

第37回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム



日時2017年10月21日(土)・22日(日)

会場慶應義塾大学(日吉キャンパス) 来往舎2F 中会議室

大会責任者 辺見葉子
(連絡先) hemmi@flet.keio.ac.jp

大会参加費一般 1,000 円学生 無料
懇親会費一般 5,000 円学生 2,000 円

第37回 日本ケルト学会 研究大会 プログラム

10月21日(土)

- 12:30～ 受付開始
- 13:00～13:10 挨拶 代表幹事 梁川英俊氏
- 13:10～13:55 個別報告1 「正書法から読み取れる現代ウェールズ語の音韻体系について」
報告者 小池剛史氏 司会 吉田育馬氏
- 13:55～14:40 個別報告2
「トマス・ムーアのあるバラッドについて
—富山大学附属図書館所蔵ヘルン文庫の書き込み調査より—」
報告者 中島淑恵氏 司会 辺見葉子氏
- 14:40～15:00 休憩
- 15:00～15:45 個別報告3
「『マントのリームル』における、不貞に対するアーサー王の態度を巡って」
報告者 林邦彦氏 司会 小路邦子氏
- 15:45～17:15 基調講演
「19世紀フランスにおける人種理論の発展と人類学」
講演者 竹沢尚一朗氏 司会 梁川英俊氏
- 17:30～ 懇親会

10月22日(日)

- 10:15～ 受付開始
- 10:45～11:30 個別報告4
「西洋古典文学の中世アイルランドでの受容」
報告者 長島真以於氏 司会 平島直一郎氏
- 11:30～11:45 休憩
- 11:45～12:30 個別報告5
「ウェールズの地理学書Delw y Bydにおける「ヨーロッパ」のコンセプトについて」
報告者 ナタリア・ペトロフスカイヤ氏
司会 森野聡子氏
- 12:30～13:45 総会
- 13:45～14:30 昼食
- 14:30～17:00 フォーラム・オン 「人種論としてのケルト」
- 報告1 妖精・ケルト・人種論の交錯 報告者 辺見葉子氏
報告2 ゲルマンが先かケルトが先か 報告者 森野聡子氏
報告3 ブルトン人種とは何か？ 報告者 梁川英俊氏
- 17:00 閉会の辞 大会責任者 辺見葉子氏

基調講演

19世紀フランスにおける人種理論の発展と人類学

講演者 竹沢尚一郎氏

人種による差別は古くから存在するが、それが人種理論として体系化されたのは19世紀であった。その背景にあったのは、医学などの実証科学の発展、教会の権威の失墜と進化思想の普及、植民地支配の拡大、世界中の諸民族の出会い、などの条件であった。ここでは、脳の言語中枢の発見者として名高いポール・ブロカを取り上げながら、フランスにおける人種理論の発展と、それが人類学の成立に果たした役割と脱人種化の試みをたどる。

1824年に生まれ、解剖医として多くの脳解剖をおこなったブロカは、脳機能の局在分化を明らかにし、医学界での名声を高めた。また進化論の熱心な擁護者であった彼は、教会や保守派の圧力を乗り越えて、1859年に「パリ人類学協会」を設立した。これは人間を総合的かつ唯物論的に研究することを目的とし、人類学の名を冠する世界初の学会であった。ブロカは人間集団の差は「種」としての違いであると考え、脳をはじめとする身体部所を比較計測することで証明しようとしたが、こうした考えは、ロンドンやマドリッド、モスクワ、ベルリンにあいついで誕生した人類学協会の多くに引き継がれ、社会的にも多大な影響を与えた。多くの民族を植民地として取り込んでいた英仏社会にとって、各民族の優劣を科学的に証明できるとしたブロカの学説は格好の理論枠を提供したのである。

ある意味で文化人類学(社会人類学)の歴史は、こうした人種理論からの離脱の歴史である。初期の代表的な文化人類学者であるバーネット・タイラーは、「文化」を強調することで人間の生物学的な理解からの離脱をはかったが、西欧とオーストラリアを両端とする人種的階梯は維持したままであった。それからの離脱が可能になったのは、フランツ・ボアズの文化相対主義とエミール・デュルケームの社会学思想であり、それが一般化したのは1930年代以降であった。

フォーラム・オン 問題提起

ケルト人種とは何か？ What is the Celtic Race?

今日のケルト学は多く「言語」の問題として語られる。そこで好まれるのは「ケルト語話者」であり、「ケルト人」ではない。しかし「ケルト」は、その語が世界史に登場したときから、多くエスニシティの問題として語られてきた。そこに言語という要素が加わるのは、たかだか17世紀のことにすぎない。

「ケルト文学」という言葉を用いて、「ケルト人」の特質を初めて明快に言語化したエルネスト・ルナン(Ernest Renan)の論考のタイトルは、直訳すればそのものずばり『ケルト人種の詩歌』(*La poésie des races celtiques*, 1845)である。そして、この論考が登場した19世紀中葉から20世紀にかけての時代は、文字通り人種としてのケルト人をめぐる議論が最も白熱した時代であった。

現代のケルト学に〈言語論的転回〉が要請された理由のひとつも、おそらくはこの白熱すぎた議論を「恥ずべき過去」として忘れるためであったに相違ない。

このフォーラム・オンでは、長い歴史を持ちながら、今や西欧のケルト学者が取り上げることのほとんどない「人種としてのケルト」という問題を、ブリテン諸島と大陸の議論を軸に再検討することを目的にしている。それはまた、今日の「ケルト学」を構成する前提事項を明らかにすることにもつながるだろう。

(文責・梁川英俊)

フォーラム・オン報告1

妖精・ケルト・人種論の交錯

Where fairies, the Celts and racial theories meet

報告者 辺見葉子氏

妖精はどの時代にも「他者」、規範の外側に在る「異なる者」の表象であり続けてきたが、同時にその姿は時代を映し出し、様々な位置づけをされてきた。

今回のフォーラム・オンのテーマである人種論の観点からは、Thomas Keightleyによる*The Fairy Mythology* (1828; expanded ed. 1850)に見られるような、広くヨーロッパ各地のネイションの文脈の中で妖精伝承を提示しようとするアプローチが、妖精を「ケルティック」なものと限定・特定する方向性を強めて行く過程及びその背景が興味深い。アイルランドにおける「ケルト復興」の潮流の中、Yeatsらのナショナリズムやケルティシズムと、コロニアリズム的政治プロパガンダの双方に「妖精」が援用された様は、「ブリジット・クリアー焼死事件」に典型が認められよう。一方、アイルランドにおける、ゲール人により征服された先住民(零落した神々)を妖精と見なす起源説は、ブリテン島において妖精の起源をケルト人により征服されたブリテン島先住民およびその記憶に求める説と平行するが、こうした妖精の起源をめぐる諸説も、人種論の観点からの考察が可能であろう。

フォーラム・オン報告2

ゲルマンが先かケルトが先か

On the Celtic/Gothic Furore in the nineteenth-century Britain

報告者 森野聡子氏

カエサルのカリア遠征とローマ帝国によるヨーロッパ支配は、アルプス以北のヨーロッパの三大バルバロイとして、スキタイ人、ケルト人、そしてゲルマン人の存在を地中海世界に認知させることになった。これら三者の関係は、カエサルやタキトゥスの著作が入手可能になる16世紀以降、さまざまな議論を呼び、特にスコットランドとウェールズの古事研究家にとっては、ブリテン諸島の先住民を三つのうちのどれと特定するかという問題とかかわって論じられてきた。

本発表では、スコットランドの古事研究家John Pinkertonが1780年代に提起したスコットランド人＝ゴート人起源説とウェールズの古事研究家Thomas Priceの反論(1829年)、いわゆる「ゴシック＝ケルト論争」を取り上げる。ピンカーターの言説は、ケルト人種に対するアングロ＝サクソン、あるいはテュートン人種の優位性という連合王国内での人種論の端緒であるとともに、ゲルマン人／アーリア人神話へと結びつくものであることから、彼の論が誕生した背景や受容について考察したい。また、プライスの著作は人相学 (physiognomy)の理論に基づくものであり、形質人類学におけるケルト人の定義との関連についても分析する。

フォーラム・オン報告3

ブルトン人種とは何か？

Qu'est-ce que la race bretonne?

報告者 梁川英俊氏

「ケルト人種とは何か？」という問いが最も盛んに論じられたのは19世紀のフランスであった。ケルト人種はそこで白色人種中最も優秀な人種と称揚される一方で、たとえば『人種不平等論』の著者ゴビノーは、ケルト人は白色人種と黄色人種の混血で、フランスの支配的な人種であるアーリア人はケルト人との混血によって衰弱すると唱えた。また人類学者プロカは、フランスが「ケルト的フランス」「キムリス的フランス」「キムリス＝ケルト的フランス」の三つの部分から成る主張し、パス＝ブルターニュ地方の一部にはブリテン島から渡来した純粋なキムリス人種が居住していると考えた。

本報告では、これら19世紀フランスの主要な人種理論におけるケルト人あるいはブルトン人をめぐる言説を追いながら、その「ケルト学」への影響について考察してみたい。時間があれば、ブリテン島の人種理論との相関関係や、今なおブルターニュに俗説として残る「ブルトン人モンゴル起源説」についても言及してみたいと思っている。

個別報告 1

「正書法から読み取れる現代ウェールズ語の音韻体系について」

報告者 小池 剛 史 氏

現代ウェールズ語正書法を決定づける基盤となった『ウェールズ語正書法』(*Orgraff yr iaith Gymraeg*, 1918; 以下『正書法』)の冒頭でジョン＝モリス・ジョーンズは序言において、「話し言葉の素材を音声とすれば、書き言葉の素材は音声を表すための、目に見える文字である。従って『正書法』が直面する問題は大きく二つに分かれる。すなわち、(1)どのような発音が標準的であると考えられているかを定め、さらに (2)それらを表すための最適な文字を選ぶこと、である」(『正書法』, iii)と述べている。これによれば、現代ウェールズ語の正書法は、ウェールズ語の「標準的発音」を念頭に置き、それを曖昧さを残すことなく明快に表すことのできる正書法を提示したのである。

現代ウェールズ語の綴りが示す「標準的発音」とは、一体どのようなウェールズ語発音なのだろうか。上述のモリス・ジョーンズは序言の中で「標準的発音」は、ウェールズ中世、特に12世紀後半から14世紀前半に活躍した「公子らの詩人」(Poets of the Princes)と呼ばれる詩人らの間で地域に関わらず標準として認識されていた発音であると述べている。従って、現代ウェールズ語の綴りが表す「標準的発音」は、中世に遡る、極めて古い発音であり、現代口語ウェールズ語のそれとは大きく異なるのは当然である。

本発表では、正書法が表している「標準的発音」がどのような発音であるのか、口語ウェールズ語と比べてどのような共通点・相違点があるのか、さらに現代ウェールズ語社会の中でどのような位置づけを持っているのかを明らかにしたい。

個別報告 2

トマス・ムーアのあるバラッドをめぐって

—富山大学附属図書館所蔵ヘルン文庫の書き込み調査より—

On a ballad of Thomas Moore

- From a survey of the handwritten notes of Lafcadio Hearn

報告者 中島 淑 恵 氏

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲、1850-1904)は、東京帝国大学における講義の中で、トマス・ムーアにしばしば言及している。本報告で扱うバラッドはハーンがとりわけ好んでいたものようで、講義中でも全文を引用して紹介している。富山大学附属図書館所蔵のヘルン文庫(小泉八雲旧蔵書)には、トマス・ムーア詩集が収蔵されていて、このバラッドのページには片仮名でおびただしい書き込みがあり、和訳を検討した形跡がある。ハーンは通常大学の講義では和訳をつけることはなかったはずで、この書き込みは講義の準備というよりは息子の一雄がこの詩を教えるためのものであったものと考えられる。このことは一雄の述懐とも一致するものである。大学の講義の中ではこの詩をさほど称賛していないハーンではあるが、息子の暗唱課題としては重要視していたと思われることから、この詩を通してハーンが一雄に伝えたかったことについて考えてみることにしたい。

また、この作業を通じて、その父の出自(チャールズ・ブッシュ・ハーン、アイルランド出身の英国軍医)からとかく自明のこととされがちであるハーンのケルトまたはアイルランドに対する認識あるいは姿勢を、その講義録や著作にあたっていま一度検証してみたいと考えている。

個別報告 3

『マントのリームル』における、不貞に対するアーサー王の態度を巡って

An Essay on King Arthur's Attitude towards the Unchastity in *Skikkjurímur*

報告者 林 邦 彦 氏

13世紀のノルウェーにおいてフランス語原典からノルウェー語に翻案された後、さらにそれがアイスランド語に翻案されたものだと考えられているアーサー王伝説を扱ったサガ作品群のうち、身に着ける女性の不貞に応じ、極端に伸び縮みするマントを扱った『マントのサガ』(*Möttuls saga*)と呼ばれる作品は、フランス語作品『短いマントの短詩』(*Le Lai du Cort Mantel*)がノルウェー語への翻案を経てアイスランド語に翻案されたものと考えられている作品であるが、この『マントのサガ』を基にする形で、恐らくは15世紀にアイスランドで成立したのと考えられている『マントのリームル』(*Skikkjurímur*)と呼ばれる物語詩は、基本的な物語内容は『マントのサガ』を踏襲したものであるが、『マントのサガ』と比べ、作品中、次々と明らかとなる宮廷の女性の不貞に対するアーサー王の態度に大きな変化が施されているのが特徴である。本報告では、『マントのリームル』において『マントのサガ』と比較した際に見られる、不貞に対するアーサー王の態度を巡る変化傾向を、アーサー王伝説やトリスタン伝説に題材を取った他のサガ作品に見られるそれぞれの原典作品からの登場人物の言動を巡る変化傾向と比較し、これらの作品のケースとの類似点と相違点を浮き彫りにし、その背景事情を探りたい。

個別報告 4

中世アイルランドに於ける異教文学の翻案とスコリア利用の意図

—De Bello CiviliからIn Cath Cathardaへ—

In Cath Catharda and the Use of Scholia: Adapting and Studying De Bello Civili in Medieval Ireland

報告書 長島真以於氏

古典古代文化の保存に中世アイルランドが果たした役割が広く知られる一方、10-13世紀にかけて作られた一群の異教ラテン語文学作品の翻案、およびその翻案化が俗語文学の発展に与えた影響についての研究は、未だ発展途上にある。

今回検討する*In Cath Catharda*は、Lucanus(39-65 AD)の叙事詩*De Bello Civili*(カエサルとポンペイウスの間で争われた49-45 BCのローマ内戦が舞台)の現存10巻の内、第7巻までを元に、原典に見られない情報や描写を数多く加えて作られた翻案作品である。これら改変箇所の一部の典拠が*De Bello Civili*のスコリア(古注)にあることは既に指摘されているが、Meyer, 'The Scholiast and the Irish Lucan' (1953)以降、合計5つの論考(Meyer [1959], Harris [1994], Miles [2009], O'Hogan [2014], Poppe [2016])があるのみで、網羅的に分析がなされたとは言えない。本発表では、先行研究で参照されてこなかった他のスコリア伝承写本(*Berolinensis* 35, *Lipsiensis* 10 & 76, *Arnulfi Aurelianensis Glosule*等)とそれら写本に付随する*accessus ad auctores*(Arnulf, Conrad of Hirsau等)を新たに参照し、従来の研究成果の再検討を行うと共に、スコリア利用箇所が特定の領域に偏ることを明らかにし、翻案作成の意図や当時の読者の関心領域について論じる。

個別報告 5

ウェールズの地理学書*Delw y Byd*における「ヨーロッパ」のコンセプトについて

The Concept of ‘Europe’ and Medieval Welsh Geographical Text *Delw y Byd*

報告者 ナタリア・ペトロフスカイヤ氏

NWO(オランダ国立研究機関)提供のVENIプロジェクト『中世ヨーロッパの地理学書における「ヨーロッパ」の定義』について報告する。このプロジェクトは2017年2月からユトレヒト大学にて報告者がプロジェクトリーダーとして始めたものである。

本プロジェクトでは、12世紀にラテン語で書かれた百科書*Imago Mundi*がヨーロッパ各国の言語に翻訳される過程の中で、どのような変更がなされているかということを中心に調査研究している。その翻訳の一つが、ウェールズ語の*Delw y Byd*である。今発表では、*Delw y Byd*における「ヨーロッパ」のコンセプトと*Delw y Byd*と*Imago Mundi*の違いについて報告する。

報告冒頭において、昨年行ったAlexander Von Humboldt Foundation提供の*Delw y Byd*の新しいエディションのプロジェクトについて紹介する。

総会議題

1. 会則の改定
2. 2016年度収支決算報告
3. 2017年度予算案
4. その他

会場案内

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1

慶応義塾大学 日吉キャンパス 来往舎 2F 中会議室



■交通アクセス

・日吉駅(東急東横線、東急目黒線／横浜市営地下鉄グリーンライン)徒歩1分

※東急東横線の特急は日吉駅に停車しません。





来往舎はこちら⑨番の建物になります。

日吉駅改札より東口に出て、信号を渡り、銀杏並木道を直進して下さい。100mほど登ったところにあるガラス張りの建物が来往舎です。